

# 新型コロナウイルス禍における鹿児島市立少年自然の家における取組と今後の運営について

鹿児島市教育委員会 生涯学習課長

前鹿児島市立少年自然の家 所長 西國原 学

## 1. はじめに

令和2年2月末、全国の小中学校と高校、特別支援学校に臨時休校が要請された。休校中の子供たちの生活は一変し、これまでのように友達と遊んだり、勉強したりすることができなくなり、ゲームやSNSの時間が増えるなど生活リズムを崩す子供たちが見られるようになった。また、学校が再開されても、授業形態や給食のとり方、学校行事や部活動が制限されるなど、本来子供たちにとって楽しい学校生活が分断され緊張に包まれることとなった。さらに、マスク着用が義務付けられ、友達の表情が読めなくなるなどコミュニケーションが妨げられ、子供の笑顔を見る機会が減ってきた。

私は、新型コロナウイルス感染症流行下の令和2年4月、大きな不安を抱えて鹿児島市立少年自然の家（以下、本所）に着任した。集団宿泊学習の延期や利用団体のキャンセル、主催事業の中止等の対応に追われる日々であり、初めて経験する社会情勢の中で、施設運営に取り組んできた。

そこで、新型コロナウイルス禍における本所の取組について紹介するとともに、今後の運営について考えてみたい。

## 2. コロナ禍における体験活動の重要性

体験活動は、「社会を生き抜く力」として必要となる基礎的な能力を養うという効果があり、コミュニケーション能力や自立心、協調性、チャレンジ精神、創造力、変化に対応する力等が育まれることが期待されている。しかし、体験活動が制限されることにより、これからを生きる子供たちにとって様々な影響が出ることを懸念する。

国立青少年教育機構がコロナ禍に行った調査によると、自然体験活動を通して、怒り感情やストレス反応、自信といったメンタルヘルスの改善が見られたことが報告されている。

これらのことから、子供たちの体験の場や機会が失われつつある中において、体験活動を推進していくことは重要であり、コロナ禍でも子供たちが安心して体験活動が実施できるよう様々な対策や工夫を講じる必要がある。

## 3. 具体的取組

コロナ禍における体験活動の重要性を踏まえ、感染防止対策を講じ実施した「受入事業」、「主催事業」、「次世代を切り拓く青少年育成事業」、「地域等との連携」における取組を紹介する。

### (1) 受入事業について

本所の利用団体の約50%は小中学校であり、そのほとんどは学校行事である集団宿泊学習として利用している。

学校をはじめとする利用団体には、国が示した「新しい生活様式」や「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル」、「本市の基本方針」等を踏まえ、新たに作成した本所独自のマニュアルや手引きに基づき、感染防止対策を講じながら運営に努めた。

また、県内の青少年教育施設との情報共有に努めながら、感染状況の変化に応じてマニュアル等の改定を行ってきた。



【本所のマニュアルと手引き】

まず、利用団体には、マスク着用や手指消毒、手洗い、うがい、咳エチケット等の基本的な感染対策を徹底するとともに、2週間前から当日までの参加者の健康状態を把握することや、宿泊する場合は朝夕の検温も行うようにした。

なお、マスク着用については、野外活動の際や熱中症対策として外すことについては、利用者の判断とした。

主な感染対策については次のとおりである。

- ◆入所式でのオリエンテーションでは、プレゼンテーションを活用し、従来よりも10分間短縮し、発声する機会を少なくした。
- ◆感染リスクが高まる食事については、食堂の上限人数を定員240から120人に縮小し、全員が同じ方向を向いて喫食するようにした。



【できるだけ距離をとって整列】



【ご飯は引率者がよそう】



【床の印(黄色)に並び、食事係が配ぜん】



【食事中は、黙食】



【片付けの時も並ぶ(緑色)】



【お皿はさっと洗い流す程度】

- ◆宿泊（本館と学習棟、テント）人数については、定員の50%に縮小した。
- ◆脱衣所のロッカーは、一人ずつ空けて使用（不足分は長机を使用）し、32人を上限とし、グループごとに5分間の時間差で入室させるようにした。

次に、感染経路として、飛沫による感染が主だったため、接触型の活動プログラムは見送り、できる限り野外活動プログラムの提供に努めるとともに、活動の解説をプレゼンテーション資料で行うことで、情報からスムーズに活動できるように工夫した。

特に集団宿泊学習については、国立青少年教育機構からの情報をはじめ、県内の本所を含めた県国公立青少年社会教育施設協議会の8施設の連携協力による速やかな対策を講じることができた。引き続き、この体制を強化していきたい。

そして、実施の検討を行っている利用団体に対しては、日

程の変更等を含め、柔軟に対応できること、感染リスクを避ける態勢を整えており、安心して利用できること等の周知を図った。

また、宿泊に伴うリスクを懸念している利用団体が多かったため、1日研修や泊数を短縮した実施や分散して宿泊することも可能であることなどを伝え、できるだけ利用団体の実情や要望に対応するように努めた。



【元気に活動する子供たち】

なお、利用者等の推移（R4年度は2月末現在）は、次のとおりである。

【年間利用者数(人)】

	R元	R 2	R 3	R 4
利用者数	44,451	23,621	24,491	28,949

【年間利用団体数(団体)】

	R元	R 2	R 3	R 4
利用者数	577	389	505	492

【集団宿泊学習受入学校数(校)】

	R元	R 2	R 3	R 4
小学校	30	21	31	29
中学校	17	5	17	19
合計	47	26	48	48

コロナ禍に入った2年度は、いずれも元年度を大きく下回っているが、3、4年度は回復傾向が見られる。

5年度の集団宿泊学習については、例年よりも10校程多い60校の受入を予定しており、今後、利用者や利用団体の増加が見込まれる。

(2) 主催事業について

親子でのキャンプやミニ門松等を作成する「親子ふれあいシリーズ」、サツマイモや冬野菜等を育てる「栽培・収穫体験シリーズ」、たくましい青少年を育てる「わんぱくシリーズ」、星空を観望する「天体シリーズ」など、季節に応じた体験活動を実施している。

まず、3密状態を回避するために、主に室内で行う体験活動の定員を縮小するとともに、これまではグループによる参加も可能としていたが、感染経路が特定しやすい家族単位での参加に限定して実施するようになった。

次に、できる限り感染リスクを回避するために、大人数やグループによる活動から、家族単位で楽しめる活動プログラムを企画するとともに、レクリエーション活動については、屋外での実施に限定した。



【家族単位でゲームを楽しむ】

そして、参加者には、開会行事で「新しい生活様式」等を踏まえた行動を心がけるよう周知するとともに、座席を指定したり活動場所を制限したりした。

特に、野外炊飯活動は、密な状況をつくりやすいことから、活動エリアを拡げ、意図的に職員を増員して安全確保も図った。



【野外炊飯活動】

なお、事業数及び参加者数の推移は次のとおりである。

		R元	R 2	R 3	R 4
体験	計画(回)	30	28	27	27
	実際(回)	29	22	16	25
参加人数(人)		3,867	1,710	1,660	3,212

元年度は、悪天候により中止した事業が1件あったが、2年度の6件、3年度の11件、4年度の2件は、全てコロナの影響による中止である。

また、事前予約なしで当日参加も可能としていた「自然の家まつり(春・秋)」については、2年度は中止、3年

度と4年度の春は参加人数を限定して開催し、4年度の秋は、従来の形態に戻して実施することができた。

### (3) 次世代を切り拓く青少年育成事業について

本事業は、心身ともにたくましい人材を育成するために、平成27年度から中高生を対象とした「かごしま創志塾」を、平成30年度からは小学5・6年生を対象とした「ジュニア創志塾」を開設し、6カ月にわたる学習や体験活動を実施している。

主な学習活動は次のとおりである。

- ◆コミュニケーション活動、自然に学ぶ体験活動、宿泊活動
- ◆社会参画・ボランティア活動、地域に学ぶ体験活動
- ◆歴史に学ぶ現地活動、異文化体験活動

そこで、児童生徒が対象となり、しかも長期にわたる事業であることから、各学校の感染状況等を踏まえながら、活動期間や募集定員等を縮小して実施するようになった。

2年度においては、活動期間は3カ月に、定員はこれまでの40人から25人にそれぞれ縮小した。3・4年度の活動期間は従来の6カ月に戻し、定員は30人に拡大して実施できた。

また、感染対策として主に次のような改善・工夫を行った。

- ◆入塾式や卒業式、講話等は、それぞれ10分間短縮した。
- ◆本人及び家族に一定期間の検温及び体調確認を行い、体調不良や感染症の疑いがある場合は参加を見送った。
- ◆学習前後の手洗い・うがい、手指等の消毒の徹底に努めた。
- ◆講話の際は、座席表・パーテーションを準備し、十分な換気の時間を設定した。
- ◆宿泊については、本館と学習棟の両方を使用し、分散化を図った。



【学習活動の様子】

さらに、不特定多数の方々が利用する施設へ訪問しての活

動では、訪問先と感染防止対策について事前協議を行い、共通理解を図った。また、バス利用の際も同様にいき、座席表を作成するようにした。

そして、塾生が学習を選択する方法を導入したり、少人数による講師への質問時間を学習後に設定したりした。また、感染リスクが少ない野外活動プログラム（新島での自験活動や白銀坂登山）を新たに企画した。



【講師に質問する塾生】



【白銀坂登山】

なお、創志塾の定員や応募率等の推移は次のとおりである。

【かごしま創志塾/中高校生(人)】

	R元	R 2	R 3	R 4
定員	40	25	30	30
応募	79	33	59	40
応募率	190%	130%	190%	130%

【ジュニア創志塾/小学5・6年生(人)】

	R元	R 2	R 3	R 4
定員	40	25	30	30
応募	64	32	61	37
応募率	160%	130%	200%	120%

創志塾の募集は、毎年4～5月にかけて行っている。コロナ禍に入った2年度と感染症流行直後の4年度は、応募に影響があったことが伺える。5年度は、定員を32人に拡大し、

活動期間も6カ月にして実施を予定している。

#### (4) 地域等との連携について

「自然の家は、青少年が利用する施設であって、地域とは遠い存在である。」と地域住民から話をいただいた。社会教育施設として、地域に開かれた運営を求められていることを再認識することだった。

そこで、コロナ禍、地域等との連携が思うように進まない状況の中、まちづくり団体として活発に活動している吉野兵六会や近隣の町内会へ出向き、本所と連携した取組はできないか、地域住民が気軽に利用できないか、お互いのよさを情報共有できないか等々、話し合いを重ねてきた。

吉野兵六会は、歴史や文化の源である吉野の魅力を発信したいという強い願いをもった方々で構成され、教育や文化、福祉において素晴らしい功績をあげている団体であり、本所は協賛団体として加入することにした。

2、3年度においては、イベント等の見送りがどうしても多くなり、地域住民との交流があまりできなかったが、定期的に行われる会議には積極的に参加し、本所の状況や活用に関わる情報発信に努めた。

そのような中、世界文化遺産とともに吉野の史跡を学び、語り継ぐために勉強会を開いている方々との出会いがきっかけとなり、3年2月、主催事業である「魅力再発見！寺山ウォーク」において、地域の方を史跡巡り等のガイド役として活用し、連携事業の第一歩を踏み出すことができた。

これを契機として、4年度の「自然の家まつり（秋）」では、吉野兵六会物語朗読劇やよしの兵六歴史街道ウォークを味わうスタンプラリーに加え、吉野校区あいご会による紙芝居や吉野東中吹奏楽部による演奏など、地域等と連携したイベントを開催できた。そして、本所と連携して行うこれらの取組は、吉野兵六会の年間行事計画に位置付けてあり、コラボ事業として定着してきている。



【解説する吉野兵六会のガイド】

東・西菖蒲谷町内会は、毎年1月にキャンプファイヤー場で無病息災を祈願する鬼火焚きを行っている。3年度からは、やぐら等に使う孟宗竹や木は、本所のものを提供するようにし、竹や木の伐採も一緒に行うようにした。本所にとっては森林整備につながり、地域にとっては運搬が省かれるという双方にメリットがあった。また、森林に関する学習会やグランドゴルフの会場として本所を利用するようになるとともに、町内会だよりが届くなど、地域に親しまれつつある。

今後とも地域に開かれた施設運営や、地域等と連携した効果的な事業実施を通して、吉野兵六会や地域等とはお互いにウィンウインの関係をさらに築きたい。



【鬼火焚きに集まる地域住民】

被害を受けた際には、森林ボランティアの方々が倒木や折れた木々の撤去作業のために何度も本所に来て、作業をしていただいたことは感謝の念に堪えないところである。

そして、本所は広い農園を有しており、家族単位で提供している95区画(1区画25㎡)全てにおいて利用されるとともに、ホームページの閲覧数がぐんと伸びていることから、体験活動のニーズの高まりが伺え、本所の意義や価値が認識されていることをあらためて実感した。

【HP閲覧数(人)】

	R元	R2	R3	R4
閲覧数	4,750	10,372	11,686	14,144

※R4年度は2月末現在



【ボランティアによる森林整備】

## 4. 成果や課題

### (1) 成果

コロナ禍における取組を通して実感したことは、ピンチはチャンスとなり得るということだ。

定員の縮小や活動内容の工夫により、感染防止が期待されるだけでなく、例えば、創作活動では、ハサミや小刀を、農園での体験活動では、鋏やスコップを使用しており、人と人の距離を保ったり、小グループで活動したりすることで、これまで以上に安全性が担保されることが分かった。コロナ禍の3カ年は、スクラップ&ビルド方式で事業を見直す期間となったことは大きな成果と言えよう。

また、感染拡大防止による利用団体の減少や主催事業の縮小、中止等を余儀なくされることが多かったが、これまであまりできなかった樹木伐採や野外活動施設等の修繕に取り組める時間的なゆとりが生まれ、集中的に環境整備を行うことができた。

さらに、「ちょっとボランティア『森の美化プロジェクト』」と題し、森の美化作業と伐採した樹木を薪として持って帰っていただくという新たな企画をきっかけに、「森林ボランティア団体」が誕生した。4年9月に台風14号の直撃を受け大きな

### (2) 課題

コロナ禍、事業の中止や縮小により、実際活動の体験や経験を積むことが少なく、職員の資質向上の面では課題が残った。今後、実技や実際場面を想定した指導方法の研修を通して、不安の解消に努めながら資質向上を図っていく必要がある。

また、感染拡大防止に伴い、利用をキャンセルする団体が多くなり、食堂(委託業者)の運営にも影響が見られるようになった。そこで、食堂利用の促進に向けて、主催事業において、食堂(昼食)利用をプログラムの中に導入し、職員も一緒に昼食をとるようにした。しかしながら、物価や人件費等の高騰により、厳しい食堂運営となっているようである。

## 5. 今後の運営について

コロナ禍における青少年教育の課題については、まず、体験活動の減少があげられる。それには、学校や地域における体験活動の減少、本所で行う事業等の縮小による活動の停滞、人と人とのつながり(交流)の希薄化等々が含まれ、洗

い出せば枚挙にいとまがない。しかしながら、近年の少子化や核家族化、デジタル化、家庭環境・生活スタイルの多様化など都市部や豊かな自然環境のある地域のどちらにおいても現代的課題として体験活動が減少している状況に変わりはない。

コロナ禍におけるこれまでの対応については、青少年教育施設として確実に記録し、整理しておく必要があり、それらを踏まえて、今後の本所の運営について考える。

まず、青少年教育施設は、昭和46年の社会教育審議会答申の「急激な社会構造の変化に対処する社会教育の在り方について」の中で「恵まれた自然環境の中で、野外活動や自然探求を行い、集団宿泊訓練を通じて、規律・協同・奉仕等の精神を体験的に学ぶとともに豊かな情操を培い、心身ともに健全な育成を図ることができるよう、少年自然の家を整備し、その活用について家庭・学校等との連携を強化する必要がある。」と示された経緯がある。

また、昭和48年公立少年自然の家について（文部省）の中に、施設の定義や教育目標等が具体的に記されている。本所のスローガン「遊ぼう！学ぼう！きたえよう！」はまさにその教育目標を見事に表現したものであり、昭和50年7月開所以来、脈々と引き継がれている。社会状況がどんなに変化しようとも、スローガンは不変であり、理念として継承したいと考える。

「遊ぼう」 自然の恩恵に触れ、自然に親しむ心や畏敬の念を育てること。

「学ぼう」 集団宿泊生活を通じて、規律・協同・友愛・奉仕の精神を養うこと。

「きたえよう」 野外活動を通じて、心身を鍛錬すること。

今後、次のことを重点にして運営していきたい。

- ◆令和5年3月にマスクの着用に関する指針が出された。緩和傾向にあるものの、マニュアル等に基づく適切な施設運営を継続する。
- ◆受入の際、制限から緩和へ見直した内容については、利用者に丁寧な説明を行う。
- ◆周辺環境や施設の機能を生かした多様な体験活動の場や機会の充実を図る。  
また、子供の発達段階に応じて、自然体験活動を主として、生活・文化体験、社会体験等の多様な体験活動プログラムを提供する。

- ◆IKR 調査を通じた体験活動の有効性を検証する取組を通して、子供たちの自発性や自主性等を養い、達成感を味わわせる活動プログラムの開発に取り組む。
- ◆応募率の高い事業については、定員や回数を増やすなど実施方法を検討するとともに、利用者のニーズや自然の家運営委員会等の意見や提言を踏まえ、絶えず事業の見直しを図っていく。
- ◆主に体験活動に関する分野で活躍する人材や団体の掘り起こしを行い、人材バンクとして見える化を図り、有効活用に努め、魅力あふれる事業を展開する。
- ◆創志塾においては、キャリア教育の実践につながる活動プログラムを企画する。  
また、卒塾生を創志塾の講師として招聘し、塾生同士の持続可能なネットワーク体制を構築する。
- ◆吉野兵六会を地域連携の核に据え、他の団体等（社会教育関係団体・小中学校・企業等）との連携強化を図る。
- ◆安心・安全な野外活動を実施するためには、森林整備は欠かせない。本所を拠点にして結成された森林ボランティア団体との良好な関係を継続する。
- ◆食堂運営については、物価や人件費の高騰を踏まえ、食事代を引き上げるとともに、主催事業における食堂利用を計画し、食堂利用の促進を図る。

## 6. おわりに

現代の子供たちにはリアルな体験が不足していることが指摘され、さらに、昨今、コロナ禍でこの傾向に拍車がかかっている。このような状況の中で、自然とのふれあいや仲間と協力して体験活動を行う社会教育施設としての少年自然の家の果たす役割は、ますます重要なものになっていくであろう。

現在、次世代を切り拓く青少年育成事業「かごしま創志塾」・「ジュニア創志塾」をはじめ、ワイルドキッズ林間学舎、どろんこ農園など、様々な体験活動を通して青少年の健全育成に取り組んでいる。

とりわけ、寝食を共にする集団宿泊生活での仲間との交流や、農園で汗と泥にまみれ、働く喜びと尊さを味わう感動は、子どもたちの人生経験の中で、貴重な原体験として残ることを信じている。

今後も次世代を担う青少年の心にやる気と希望を与える事業を展開するとともに、地域に開かれた自然の家を目指していきたい。